同志社女子大学生活科学　*Vol*. 45，73～77（2011）

≪資　　料≫

特別支援学校中学部における家庭科教育の課題
――過去 15 年間を振り返って――

The Problems of Home Economics Education in School for Special Needs at Junior High School Level
～From 15 Years of Change～

大　隅　順　子
（Junko OHSUMI）

Ⅰ．問題と目的

学習指導要領によると，知的障害の生徒に対する教育を行う特別支援学校の高等部段階の家庭科の目標は「明るく豊かな家庭生活を営む上に必要な能力を高め，実践的な態度を育てる。」である。ところが中学部段階には，家庭科という独立した教科はなく，「職業・家庭科」という合同教科が置かれている。小学部にいたっては「生活科」という大きなくくりの中にその内容が含まれている。「職業・家庭科」の教科目標は，「明るく豊かな職業生活や家庭生活が大切なことに気付くようにするとともに，職業生活及び家庭生活に必要な基礎的な知識と技能の習得を図り，実践的な態度を育てる。」となっており，高等部の目標と比較するとより基礎的なものに重点が置かれているのがわかる。家庭科が家族の問題など人間生活そのものを取り上げる教科であることを考え合わせると知的障害児（者）の自立を支援する教科の一つとして，彼らの発達・教育に有用な教材を多く提供し，効果的な指導が期待される教科であろう（松本・都築・林，1997）。

しかし，実際に実施されている家庭科の内容の多くは食物と被服領域を中心とした実習に偏り，その他の領域についてはあまり触れられていない（竹田・田辺・高橋，2009）。実習中心で，保育・家族・消費・環境などの領域がほとんど扱われていない（佐藤・石谷・福田，1984；田結・岡田，1990）のが現状である。また学習指導要領における家庭科の規定にも関わらず，知的障害特別支援学校では作業や生活単元に解消されている事例も多くみられる。しかし特別支援学校における家庭科教育の役割・意義としては，①生徒が家庭生活活動について知ることができる。②家庭と連携・協力して生活に活かせるようにする。③生徒が家庭生活や将来の生活を意識する。④家庭科の教育活動そのものが生徒の生活支援・地域支援につながる（竹田・田辺・高橋，2009）などが挙げられ，その内容は彼らの将来の生活に直結し重要である。

そこで，本研究によって筆者の勤務している兵庫県立こやの里特別支援学校の過去 15 年間の中学部での家庭科の教育課程や実施内容を明らかにすることで，特別支援学校における家庭科教育の現状を整理し，未来へつなげていく礎としたいと考えた。平成 17 年 12 月の中央教育審議会「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」においても「知的障害と自閉症を併せ有する幼児児童生徒に対し，この二つの障害の違いを考慮しつつ，障害の特性に応じた対応について，引き続き研究を進める必要がある。」と述べられている。自閉症の有無など，それぞれの特性に合った支援の方法を検討していくためには，まず過去と現在の指導実態を正確に把握しなければならない。そこで本稿では各種資料に基づいて 15 年間の家庭科教育の実践の歩みを明らかにしていく。

Ⅱ．調査内容

筆者の勤務している兵庫県立こやの里特別支援学校は

兵庫県立こやの里特別支援学校教諭

生徒数が 300 を越えるマンモス校であり，スクールバス 6 台を使って広範囲から生徒を受け入れている。中学部は全学年で 10 クラスあり，中学部生徒数は 70 名程度である。中学部教職員は 30 名弱であるが，うち家庭科の教員免許状がある教職員は筆者のみである。新版 K 式発達検査では最も高い生徒で 7 歳 6 カ月，ことばを持たない生徒や移動に常に介助が必要な生徒，発達年齢が 0 歳代の生徒も多数おり，その障害の幅は広く多様である。近年の特徴としては広汎性発達障害の診断を受けている生徒が多くなり，いわゆる自閉症と知的障害の合併型が多数を占めている。

本調査では学校に保管されている過去の記録や文献，各種資料から過去 15 年間の家庭科教育の変遷と現状および特別支援学校での教科書選定の現状を明らかにする。尚，資料作成に関しては，校内保管されている「こやの里特別支援学校中学部の歩み」（平成 8 年度～平成 22 年度）の 15 冊と，現存している過去の家庭科の教科会ファイルを参考にした。

Ⅲ．結　果

1）過去 15 年間の家庭科学習内容とその分野

Figure 1 は兵庫県立こやの里特別支援学校における過去 15 年間の中学部の家庭科の授業内容での履修・未履修分野を示したものである。

	衣		食		住	経済	保育	福祉
	理論	被服実習	食育	調理実習				
H 8（1996）	×	○	×	○	×	×	×	×
H 9（1997）	×	○	×	○	×	×	×	×
H 10（1998）	×	○	×	○	×	×	×	×
H 11（1999）	×	○	×	○	×	×	×	×
H 12（2000）	×	○	×	○	×	×	×	×
H 13（2001）	×	○	×	○	×	×	×	×
H 14（2002）	×	○	×	○	×	×	×	×
H 15（2003）	×	○	×	○	×	×	×	×
H 16（2004）	×	○	×	○	×	×	×	×
H 17（2005）	×	○	×	○	×	×	×	×
H 18（2006）	×	○	×	○	×	×	×	×
H 19（2007）	×	○	×	○	×	×	×	×
H 20（2008）	×	○	×	○	×	×	×	×
H 21（2009）	×	○	×	○	×	×	×	×
H 22（2010）	×	○	×	○	×	×	×	×

Figure 1　過去 15 年間の中学部家庭科授業内容
○：履修　　×：未履修

これにより被服実習と調理実習の 2 つの実技系の授業内容だけで，ほぼこの 15 年間，授業を組み立ててきたことが明らかになった。住・経済・保育・福祉の各領域の授業が中学部段階でなされた形跡は皆無であった。教科等に関する指導の重点として，中学部の職業・家庭科においては過去 15 年間ずっと「職業生活・家庭生活に必要な基礎的な知識・態度や技能を習得できるようにする。手指の巧緻性や道具を正しく使う力を身につけ，完成への見通しをもって作業に取り組む力をつける。興味関心を持って，物を作る喜び，楽しさを実感する。」ということを挙げていた。その内容としては主に，手芸・調理・木工・洗濯の 4 分野であり，例えば手芸では，「手と目の協応動作の能力を高め，手指の巧緻性を高める。完成への見通しを持ってものを作る喜びを実感し，継続して取り組む力を養う。それによって実生活に必要な知識や技能を取得する。」を年間目標としていた。調理では「食に関する関心を高め，基本的な調理技術を身につける。安全かつ清潔への意識を高め，家庭での食事作りに参加するきっかけとする。」ということを年間目標として挙げていた。

2）過去 15 年間の被服分野製作作品・教材教具

Figure 2 は兵庫県立こやの里特別支援学校における過去 15 年間の中学部家庭科での被服分野製作作品・教材教具を示したものである。

	被服実習　内容												
	スウェーデン刺繍	クロスステッチ	刺し子	玉通し	織物	紙すき	手縫い	ミシン	シルクスクリーン	洗濯	アイロン	衣服の整理	その他
H 8（1996）	○	○	○	○	○	○							
H 9（1997）	○	○		○			○	○					
H 10（1998）	○	○		○				○	○	○			
H 11（1999）	○			○			○	○		○			
H 12（2000）	○									○			アクリルタワシ
H 13（2001）	○		○					○		○			ボンボン手芸
H 14（2002）	○		○										さをり織り
H 15（2003）	○		○							○			
H 16（2004）	○												縁かがり
H 17（2005）	○		○				○			○			ビーズ
H 18（2006）	○		○	○			○	○		○	○		絞り染め
H 19（2007）	○		○				○	○		○	○	○	毛糸のマスコット・タペストリー・帽子・ボタンつけ
H 20（2008）	○			○						○	○		編み物
H 21（2009）	○		○	○			○						学習発表会衣装作り（ビーズ縫い止め・フェルト）
H 22（2010）	○		○				○	○		○	○		

Figure 2　過去 15 年間の被服分野製作作品・教材教具

Figure 2 に示したように，特別支援学校において毎年必ず題材としてあがるのは「スウェーデン刺繍」であり，ここに「刺し子」や「クロスステッチ」が加わる。「スウェーデン刺繍」は，布目の粗さや組み合わせの模様でレベル調整しやすく，障害の軽重を考慮してその子どもに合った題材に調整しやすいため人気が高い。「刺し子」は刺し子針では小さ過ぎるので，代わりに布団針を使って実施していた。知的なハンディのある子どもや麻痺のある子どもにも，針自体にある程度の太さがあることのメリットは大きく，作業がしやすくなっていた。「ミシン」はクッションやカバンを縫う時に，教師があらかじめ下準備しておいたしつけ糸の上を，教師のサポートのもとで真っすぐ縫うという内容であり，ミシンを使って一から何かを作ることではなかった。Figure 3・4・5 に実際の教材例や作品例を示した。

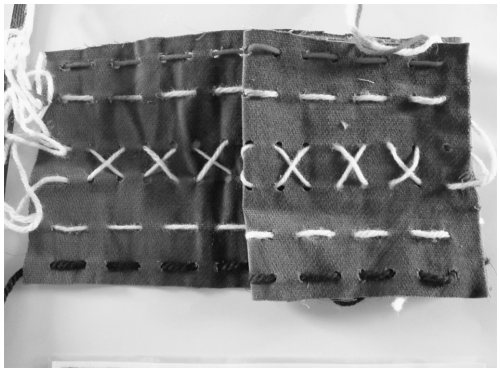

Figure 3　重度の生徒用　スウェーデン刺繍の教材

Figure 4　作品例 1

Figure 5　作品例 2

3）過去 15 年間の調理実習のメニュー

Figure 6 は兵庫県立こやの里特別支援学校における過去 15 年間の中学部家庭科での主な調理実習メニューを示したものである。

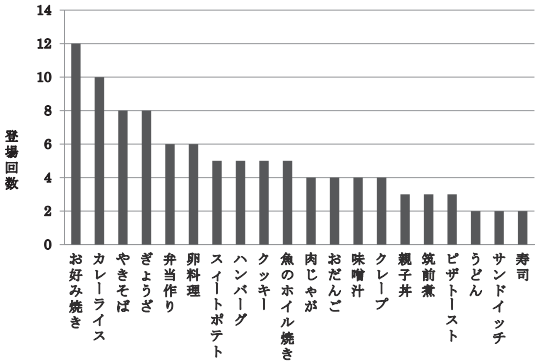

Figure 6　過去 15 年間の主な調理実習メニュー

定番のお好み焼きや焼きそば，カレーライスなどの，家庭で簡単に作ることのできるメニューが人気であった。カレーライスは同じ食材を途中からシチューにするなど応用が可能なメニューとして登場頻度が高くなっていた。調理実習後，学んだことを家庭でどうつなげていくかについての保護者との連携がこれからの課題である。特に障害の重い生徒ではサポートの方法などの共通理解が必要になる。Figure 7・8 は調理実習中の生徒の様子である。調理実習は「食べる」というゴールがはっきりしている教材であることで子どもたちの学習意欲は非常に高い。なお写真の掲載については全て保護者に確認し承諾を得ている。

Figure 7　計量スプーンに挑戦中

Figure 8　焼き上がりが待ち遠しい。カウントダウン中

4）教科書の現状

兵庫県での特別支援学校中学部職業家庭科で採択できる教科書を分野別に示す。

	発行者	図書名	分野							
			家庭科							技術科
			衣	食	住	経済	保育	福祉	総合	
教科用図書	さ・え・ら書房	母と子の手づくり教室　母と子の園芸教室　野菜をつくろう								○
教科用図書	三省堂	こどものきせつのぎょうじ絵じてん							○	
教科用図書	女子栄養大学出版部	新・こどもクッキング		○						
教科用図書	グラフ社	マイライフシリーズ 532　親子で作る手づくりおやつ		○						
教科用図書	岩崎書店	かいかたそだてかたずかん 4 やさいのうえかたそだてかた								○
教科用図書	ひかりのくに	改訂新版　体験を広げるこどものずかん 9　からだとけんこう							○	
一般図書	金の星社	ひとりでできるもん 1　たのしいたまご料理		○						
一般図書	金の星社	ひとりでできるもん 5　すてきなおかし作り		○						
一般図書	さ・え・ら書房	母と子の手づくり教室　母と子のたのしい草木染めⅠ	○							
一般図書	ジャパンクッキングセンター	ときには腕をふるってみよう 絵でわかるクッキング		○						

Figure 9　平成 21 年度の職業・家庭科における採択候補教科書

分類には平成 20 年度から平成 23 年度の 4 年間使用する学校教育法第 107 条の規定による教科用図書選定のための平成 21 年度用修正版の学校教育法附則第 9 条の規定による教科用図書調査研究資料を使用した。教科等の区分の「技・家」，学年の「中学校」，障害種別の「知的」の全てを満たすものが，中学校段階での職業家庭科の教科用図書として候補にあがる。これ以外に教科書として推薦に値する本があれば，正規の手続きののち一般図書枠に入れられ教科書として採択できる道が開かれる。ただし該当学年からすぐに採択できるわけではなく，申請してから審議会の承認を経て約 2 年後の採択になるため一般図書として認められたころには該当生徒は卒業してしまっている可能性もある。平成 21 年度の中学校職業家庭科の教科書採択は，主に Figure 9 に示したこの 10 冊からの選定であった。職業科は農業園芸分野からしか選択肢はなかった。家庭科分野は，1 冊のみ衣服分野の染色関連のテキストがあったが，残りは主に食物分野，特に調理実習を中心とした教科書の選定となっていた。生徒の発達段階に合わせての選定となるため，クラスの全員が同じものを使用しているわけではないこと，教材中の文字がわからない生徒もいること，授業で教科書を積極的に活用しようとする教師が少ないこと等から，教職員の教科書に関する意見交換は残念ながら非常に低調であった。教科書が授業で十分活用されているとは言い難い現実があり，教科書を使用していない授業も目立った。主に年度末に家庭に持ち帰って，保護者と共に活用してもらうというのが例年の方法のようである。

教科書は一般の書籍を購入使用しているので決して安くはない。このような活用のされ方で本当にいいのかどうかを，教員も保護者も今一度検討すべき時に来ていると考える。

Ⅳ．考　察

卒業後の完全な生活自立を目指す高等部と，障害の重い生徒が多い中学部では「自立」の目指す目標が違っていた。「どのような力をつければ，即家庭生活の中で役に立つか」という視点に立ち，「丸ごと一人でできるこ

と」を増やし，自信をつけていくことが何よりも大切である（肥沼，1996）という主張は，ある程度 IQ の高い生徒には可能な目標になる。しかし，重度の生徒にはこれはかなり高い目標になるかもしれない。

特別支援学校小学部学習指導要領の生活科の内容では，多くの項目で「教師と一緒に○○する。」というのを第一段階の目標としている。それができた子どもには「教師の援助を受けながら○○する」という第二段階の項目に続いている。もちろん第三段階の目標は，「教師の手助け無しに」というレベルになるのであるが，子どもの障害程度を鑑みるならば，「教師と一緒に」や「教師の援助を受けながら」というサポートを前提に，あえて教材設定をしていくのもいいのかもしれない。この場合，家庭であれば「保護者と一緒に」「保護者の援助を受けながら」ということにつなげることを意味する。保護者の理解が得られれば，学校で学んだことを，再度家庭で保護者と一緒に行うことで，その学習は学校の中だけに留まらずその生徒の生活全体に広がりをもたらす結果になるだろう。

今回の調査により，15 年もの間，兵庫県立こやの里特別支援学校中学部における家庭科の学習内容はほぼ同じものであることが明らかになった。被服分野では刺繍，食物分野では理論より実習が偏重され，栄養理論，家庭経済分野，保育分野，福祉分野などは学ぶ機会が与えられていない実態も明らかになった。認知的な面から授業を理解することは難しいだろうと最初からあきらめるのではなく，まず大人と一緒ならできる題材を見つけ，子どもたちの「職業生活及び家庭生活に必要な基礎的な知識」の引き出しを少しでも増やす努力を，教員は絶えず続けていくべきであろう。

これからの特別支援教育の中での家庭科教育を考えるときに，単に刺繍作品の制作や作って食べる調理実習だけではなく，家庭科の学習を通して「人とつながる喜び」にまで広げられればと考えている。特に自閉症圏の生徒が多くなっている現在の特別支援学校の現状を鑑みると，「コミュニケーション力を育てる」という教育ニーズに，作品や食事を通じて教科として何か貢献できることがあるのではないか。「コミュニケーション」までを意識した家庭科の教材開発は今後の大きな課題であるし，強く求められていることだとも思う。これからも子どもの実態や特別支援学校に合った教科の可能性を探っていきたい。

引用文献

肥沼利江（1996）．調理学習の実際「丸ごと一人でできること」をめざして．発達の遅れと教育，**467**, 22–24

佐藤育代・石谷圭子・福田公子（1984）．養護学校高等部における家庭科教育－わが国の概況と教育目標－．日本家庭科教育学会誌，**29**, 22–27

竹田亜古・田辺絢子・高橋智（2009）．知的障害特別支援学校における家庭科教育の意義・役割に関する検討－高等部在籍生徒のニーズ調査から－．東京学芸大学紀要　総合教育科学系，**60**, 365–387.

田結庄潤子・岡田智穂子（1990）．養護学校における家庭科教育　鳥取大学教育学部研究報告教育科学，**32**, 275–290

松本携子・都築繁幸・林隆子（1997）．知的障害者の自立を支える家庭科教育の在り方をめぐって．信州大学教育学部紀要，**92**, 13–24

（2011 年 12 月 7 日受理）